氏名・(本籍地)	我　妻　智　章（広島県）
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第79号
学位授与の日付	平成23年3月15日
学位論文題目	**宗教学における実在主義と構成主義の検討―言語ゲーム論の観点から―**
論文審査委員	主査　星　川　啓　慈
	副査　司　馬　春　英
	副査　沖　永　宣　司

我　妻　智　章氏　学位請求論文審査報告書

「宗教学における実在主義と構成主義の検討―言語ゲーム論の観点から―」

論文の内容の要旨

1970年代から、哲学者のL・ウィトゲンシュタインの哲学的知見（とりわけ「言語ゲーム」）を宗教学や宗教哲学の分野に応用しようという動きが、顕著に見られるようになった。とりわけ、国外では「ウィトゲンシュタイニアン・フィデイスト」と呼ばれる研究者たち、国内では星川啓慈（本論文の主査）の研究に、その傾向が強くみられる。本論文が目指すところは、こうした研究者たちの「宗教言語ゲーム論」を批判的に摂取し、それを乗り越えることにある。

まず、本論文の目的は次の２つだとされる。①宗教学における実在主義と構成主義の対立を言語ゲーム論の観点から再考し、対立を解消させること、②哲学的考察に併せて、宗教研究に対して独自の「宗教」理解を提示し、理論研究における新たな枠組みを用意すること。

つぎに述べるべきことは、本論文の基盤となっている言語ゲーム論は、上記の研究者たちの「宗教言語ゲーム論」とは異なる、ということである。すなわち、彼らは概念相対主義を採用しながら言語ゲームを体系だった枠組みとして捉えるのに対し、本論文ではそれを否定しているという点が、相違するというのだ。重要な論点なので、もう少し詳しく述べると、次のようになる。上記の宗教言語ゲーム論者のいう「宗教を言語ゲームで捉えること」とは、諸宗教をそれらが有する独自の宗教言語に基づく体系だった枠組みとして理解することである。つまり、諸宗教は独自の言語活動を行なっているとし、その解読を試みることなのだ。それに対し、本論文では、「今」なされる「行為」という一点に重きをおいて、野家啓一のウィトゲンシュタイン理解やS・クリプキの懐疑論の知見を取り入れながら、D・デイヴィドソンがいう反概念相対主義として言語ゲームを捉え直している、というのである。

また、本論文は、宗教学と宗教哲学という２つの領域にまたがる研究だが、「宗教哲学と宗教学の理論の違い」も重要である。すなわち、本論文によれば、宗教哲学とは「宗教とは何か」と問うことであり、宗教研究において「宗教」を理解するための前提を用意する営みへと還元できる。そして、その営みとは「宗教」理解の限界を見極めるものである。これに対して、宗教学の理論とは、現実社会の宗教的な現象において「予測と制御」を可能ならしめる道具である。

そして、こうした宗教哲学と宗教学の理論の違いを踏まえたうえで、先行研究のフォローも兼ねる「はじめに」では「言語ゲーム論を受け入れた我が国の時代的背景」、第１章では「言語ゲームとは何か」、第２章では「言語ゲーム論の宗教研究への応用」、第３章では「新たな観点での宗教哲学の一試論」をめぐって議論が展開される。

これらの一連の議論から導かれる、２つの結論は次のようなものである。①実在主義と構成主義の主張は成立しえない。この両主張が間違っているとも正しいとも言えない。あるのは「今」の行為のみである。したがって、実在主義または構成主義の立場に立つ哲学は間違っている。②「言語」がないのと同様に「宗教」もない。

この２つの結論がもつメリットは、「予測と制御」を目的とする宗教学において、宗教言語ゲーム論を補完するという役割を担うことである。その役割とは、

宗教言語ゲーム論では「予測」できない問題に本論文の結論は説明を与えることができる、というものである。もう少し詳しく述べると、次のようなことである。従来の宗教言語ゲーム論は、①個々の宗教における変化の説明ができないという難点と、②日本の伝統宗教である神道・仏教の説明に不向きであるという難点とを抱え込んでいる。この２つの難点に対して、本論文が示した結論的見解は説得的な説明を与えることができる、とされるのだ。これが本論文の最終的な意義である。

審査結果の要旨

結論から述べると、本論文ならびに口述試問の内容から判断して、課程博士の学位を授与することに問題はない。その理由は、①本論文のカバーする学問領域が多岐にわたることに起因する、説明不足・議論不足もあるが、基本的にそれなりに評価できる考察がなされていること、②口述試問における主査・副査から出された疑義に対しても、自分の立場を護るためにそれなりの答え方をしたこと、である。以下では、その具体的な内容について述べたい。

本論文の評価できる点を大きく捉えて述べるならば、次の４点にある。①構成主義と実在主義という二大潮流を正面切って論じ、自分なりの結論的見解を得たこと、②宗教学者や宗教哲学者があまり気づかない視点から議論が展開されていること、③既存の言語ゲーム論に代わって、「はじめに行為ありき」という、「実在にも規則にも還元されない」立場から理論を打ち立てようとしたこと、④Ｔ・ラブロンの著作など、翻訳のない新しい外国語文献も少ないながらもきちんと組み込んでいること。

細かなところでは、たとえば次のような部分が評価できる。①宗教学・宗教哲学の分野では、議論に取り込みにくいデイヴィドソンやサールなどの分析哲学系統の知見を取り上げていることの斬新さ、②解釈の分かれる、ウィトゲンシュタインの「規則論」に関しての考察も、クリプキによる解釈の吟味などを通じて基礎的なところから行っていること。

しかしながら、議論が広範囲に及ぶことは、同時に、多くの問題も孕まれることを意味する。まず、本論文で問題だと思われる点を大きく捉えて述べるならば、次の４点にある。①「構成主義」が即「実在主義」の否定につながるのか？ 両者の突き合わせ方があまりにも単純ではないか？ ② いくら、どのように「脱構成／脱構築」しても、その行為は必ず「新たな構成／構築」になるのではないか？　③論文冒頭で宣言している「独自の理論／新たな宗教理論の構築」というほどのものは、最終的に導かれていないのではないか？ 特にこの問題は、著者が「独自の理論」という、「はじめに行為ありき」の立場からの、既存の構成主義的な宗教理論への批判や、懐疑論について著者が評価しようとした根拠の不十分さの中に現われている。④論文の構成についていえば、たとえば、言語ゲーム論を受け入れた我が国の時代的背景を論じた「はじめに」の部分が長すぎるし、実在主義を擁護する論拠の１つである挽地茂男の研究をめぐる議論があまりにも簡単である。つまり、章・節・項の構成について、さらなる配慮が必要である。

細かな問題点としては、たとえば以下のようなものが挙げられる。①リンドベックの「矛盾」を評価しているが、その矛盾を実在主義の擁護に利用する論法は妥当だろうか？　②デイヴィドソンの「言語」や「言語の否定」についての理解に問題はないか？　③「宗教の否定」の導き方があまりにも性急ではないか？ また、それは最終的に成功しているとは言えないのではないか？　④「脳内の電気信号」にすべての言説を還元する「物質主義」と「行動主義」とを同列に見ているけれども、脳への還元と行動への還元とは、心脳同一説と行動主義という大きな違いがあることを忘れてはならない。⑤議論の端々にはしばしば不注意さが見られる。たとえば「普遍的な意味が存在しないこと」を強調する著者自身の懐疑論には論理の飛躍があるし、コペルニクスについての議論には表現の不適切さが見受けられる。

上述のように、評価できる点と問題のある点の双方について述べたが、全体としては、課程博士の学位を出すに値する論文ならびに口述試問の内容であったことを報告する。本報告書では、図らずも評価できる点よりも問題点についての論述が多くなってしまったが、それは著者の将来を考えての教育的配慮である。